

よどじん

ピンホールカメラと呼ばれる特殊なカメラで撮影された、ジェット機の轟音が今にも聞こえてきそうな、迫力ある1枚の写真。その世界では不向きとされてきた動く被写体を、独自のアイデアで見事に捉えた。今月のよどじんは、

「ピンホール写真家」 神田 和幸さん



0.2mmから広がる世界

加島にある自宅には、これまでに撮影された作品がズラリと並ぶ。ピンホール(針の穴)と呼ばれるわずか0.2mmの穴を通して切り取られた映像。レンズを使わずに針の穴ほどの隙間から光を取り込みフィルムに焼き付ける。

神田さんがピンホールカメラの世界に飛び込んだのは今から10年前のこと。それまでもカメラの世界には興味があり、大型カメラを購入し撮影をしていた。しかし撮影しては暗い部屋で現像する作業の繰り返し。その孤独な世界に情熱は消えかけていた。

そんな時、知人の紹介でお会いした方と、とある作品との出会いが、その後の人生を大きく変えることになる。

きっかけは奥さま

今から10年前のお話。その頃日本中が韓流ブームで沸きかえり、神田さんの奥さまもまた、伝説となったドラマに夢中となり、あるスターに心を射抜かれ



▲撮影時のエピソードが写真とともによみがえる

た。そして、なんと来日のタイミングを見送り東京まで会いに行くことに。しかし一人で行くのは不安で神田さんをお供に指名。そして一言「あなたはこの前紹介してもらった写真家の何とかさんに会ってくれば? 一石二鳥じゃない」

一路、東京へ。

今でも写真の師匠と慕う小室氏のもとを訪れた神田さん。そこで見せていただいたピンホールカメラで撮影された1枚の「桜の花」の作品に釘付けになる。「何これ、こんな写真があるの!?’その独特の世界観に衝撃を受けた。しかし本当の衝撃はそのあとの小室氏の言葉だった。「それは妻が撮った写真ですよ。始めて4か月目くらいかなあ」

「4か月でこんな写真が撮れるのか…」

ピンホールカメラ本体の製作も手掛ける小室氏。「私にも1台作ってください」。その場で即決し懇願した。

文部科学大臣賞を受賞!

特殊なカメラといっても、レンズなしファインダーなしというのは、言わば写真の原点。小さな穴から入り込むわずかな光を、時間をかけて焼き付ける。そのため、シャッタースピード(1枚を撮影する時間)は数秒から数十分に及ぶ場合もある。昔の偉人の写真が杖をつけていたり、何かにもたれかかっていたりしているのは長時間撮影の名残。

神田さんは、そんなピンホール写真の常識を打ち破る動く被写体を捉え、数百キロで飛ぶジェット機まで撮影してしまう。

その一瞬に
すべてをかける